

網などでドブシジミが沢山とれるようになったのも変化の一つである。

4 水生植物

霞ヶ浦には七〇種以上の水生植物が分布する。一般に人目につきやすいのは、挺水植物ではアシ、マコモ、ガマ、浮葉植物ではアサザ、ヒシ、ウキクサ、沈水植物ではササバモ、エビモ、ホザキノフサモ、クロモなどである。これらが水域の条件に応じて混在して繁茂している。最近の目新しい変化は、分布の水深の限界が浅くなったことである。一〇数年前の調査結果では、水深四メートル近くまで水藻の分布がみられたのが、この頃は、二メートル以浅で水生植物の発見はまれになった。しかし、繁茂の水平水域は拡大され、量的にも多くなり、漁船の出入にも困難なところもある。今年の極端な例では、寒い時期に主に繁茂するエビ藻が、五、六月に最も多くなり、あちこちの水域で、湖面一体を被って、見渡す限りの藻場を形成することがあった。また、これら水草の繁茂は、従来は、数種から一〇数種に及ぶ混合型であったが、最近はその構成種が、単独あるいは、きわめてわずかの種に過ぎないものとなった。

5 魚類等

霞ヶ浦の魚類相はきわめて豊富である。一つには、排

水路を通して海と連がっているために海から上ってくる

魚類があることと、水産資源増殖の見地から国内外の有用魚種を盛んに移殖放流したことによる。現在七六種が記録されている。(未発表を含む)そのうち産業的に重要なのは、ワカサギ、シラウオ、ウナギ、コイ、フナ、ハゼ、タナゴ、スズキ及びボラなどであり、魚類以外では、テナガエビ、イサザアミ及びシジミなどがある。総漁獲量は、最近年ごとに増加の傾向をたどり、この一〇年で倍増し、現在年産一五万トン、二〇億円を挙げている。その主な原因は富栄養化に伴う生産力の増大である。

しかし、ここで問題となるのは、増加した魚類の内容である。かつて霞ヶ浦の名産といえはまづワカサギ、シラウオがあげられたが、能率的漁法の導入による乱獲がたつて急減し、なかなか回復できずにいる。(ただし、今年はず想像外に好漁のようである)。増加している魚種は、コイ、フナ、ハゼ類及びテナガエビなどであって、いずれも生態的に富栄養化に適合した比較的安価な魚種である。一〇年前と比較すると、それぞれ三、五倍の増加である。一般に水域の汚染が進む過程では、価値の高い魚が減少して、価値の低い魚が増加するといわれている。現在増加傾向の魚種は、いずれも食性が植物性または雑食性であって、生態系における食物連鎖の中で、魚